

第162回山口西田読書会（2018年2月10日）

前回（1月27日）のプロトコール

出席者：10名

テキスト：『自覚における直観と反省』より「跋」

今回は、前回（テキスト p.342 3行目～p.346 1行目）の復習とそれに対する議論、田中さんの哲学的問いに対する議論を経て、テキスト p.346～p.350 を輪読し、今回でこのテキストを読み終えた。次回から、『働くものから見るものへ』の「序」、「直接に与えられるもの」に進む予定である。

I. 前回の復習（プロトコールに対する問い&議論・解説）

1. アプリオリのアプリオリとは？

アプリオリをさらに反省できる立場のことをアプリオリのアプリオリという（佐野先生）

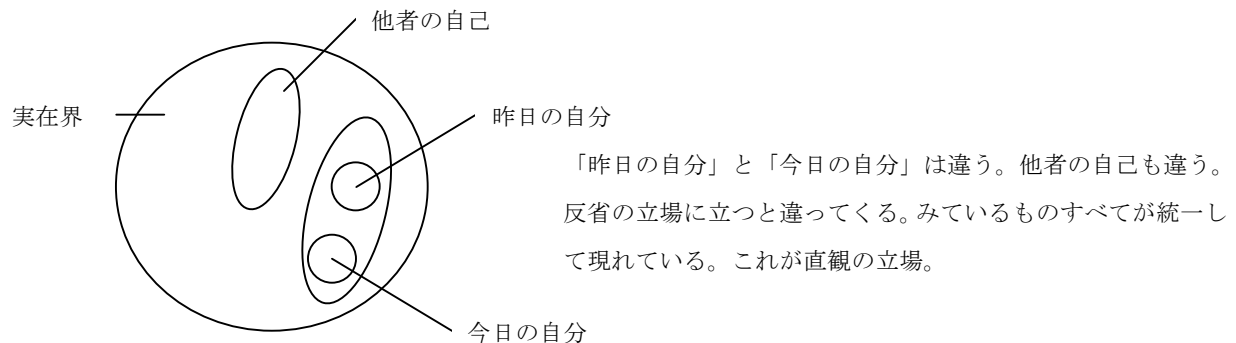
2. 「自然科学は一般化方向に進み、歴史は個性化方向に進む」というのはなぜか。

新カント派によるもの。自然科学は一般的法則を明らかにする、歴史は、法則ではなく、個々のできごとをどのように理解するかを問題とする。両者はアプローチの仕方が異なる。（歴史的なプロセスであったとしても、）自然科学はそれを、進化の法則として問題とする。

この2)の問いについては、種々の意見が飛び交ったが、ここで佐野先生から参加者に向けて、テキストにもどりましょう、テキストから学ぶ姿勢で臨みましょう、とこの会の趣旨の再確認があった。

3. 「知識の客観性の要求」とは？

これは、P.342の「我々の自己は一々の場合において自由であって、自己を否定し反省することができると共に、一つの人格として私自身の経験全体を反省してみることができる様に、我々の個人的自己は各自独立自由なるに関わらず、超個人的意識の立場から全経験を統一して見たものが実在界である。」という文章の、超個人的意識の立場からみた要求のことを言っている。（佐野先生）



*対象を、超個人的意識で統一して見たものが実在界である。

II. 前回の哲学的問いに対する議論

「芸術の世界、宗教の世界が、如何にしても反省することができないものだとなれば、そこに発展の可能性はあるのか？」

- ・ より大なる統一へ、といえ、発展していくようにも捉えられるが、宗教・芸術は極致とも言っている。
- ・ 発展という言葉は使えるのか。発現、ではないのか。
- ・ 子供が無心にビー玉がきれい、というのと、大人になってなにか石の美しさに打たれたりするのと、どうか。3歳の子の感動と芸術家の美とは、比較できるのか。比較できないだろう。
- ・ 何かに帰依したと思えた自分と元の自分、と考えると元の自分より発展した、と考えたい。
- ・ 反省の領域では、深い、浅い、と言える。

- ・ 何を芸術というのか、ということでもある。テレビのドキュメンタリーで、義足のダンサーと振付師の一体となったようなダンスを見て、何か、感ずるものがあった。
- ・ なにか、そういう一つになっている時には反省はないだろう。

III. テキスト p. 346～p. 350 の要約&議論

1. 要約

1) 我々に直接なる具体的実在とは歴史的事実である

自然界とは、ただ一つの世界ということであって、唯一の世界というわけではない。通常我々は、単に不変なるもの、いつも現在なるものを実在的と考えているが、これは、単に抽象的事実に過ぎない。真に具体的なる実在は、過去の加わったものでなければならない。我々に直接なる具体的実在は、物体现象の如き抽象的事実ではなく、歴史的事実である。自然科学的世界より具体的実在であるのは歴史的世界であり、また、芸術・宗教の世界は、より一層深い直接の実在である。我々は種々の世界に出入しつつ、向上、あるいは墮落、悲劇あるいは喜劇を経験する。

2) 我々に最も直接なる絶対自由の意志の立場は、すべての立場の根底となり、すべての立場が拠って成立する最も具体的なる立場である

物の背後にある具体的全体（目的）、これが一つのアプリオリとなり、一つの客観界が立つ。抽象的な立場は具体的立場の中において成立し、具体的立場は、抽象的立場に対してその目的となる。我々に最も直接なる絶対自由の意志の立場は、すべての立場の根底となり、すべての立場が拠って成立する最も具体的なる立場であり、すべての立場の目的となる。我々の知識は、その内容を得て客観性を充実させ、さらに進み、意志や行為に達することでその終極に達し得る。

3) 真の生命とは、実在の具体的全体の統一であり生命の発展とは具体的全体に向かって進むことである

我々が人生の目的を充実していくということは、抽象的立場からその具体的根元に移り行くことである。その具体的根元：我々の意志を対象界に投射してみたものが生命であり、これが客観化せられた目的論的統一である。生命の発展とは、具体的全体に向かって進むことである。（肉体的生命は手段であって、目的そのものではない。）「生への意志」は「文化への意志」でなければならない、具体的全体に向かって、という意味の絶対自由の意志は、理知を否定するものではなく、理知を包含するものでなければ、その意志は墮落してしまう。

4) 我々に最も直接なる絶対自由の意志は「創造して創造されぬもの」（神）と共に「創造されもせず創造もしないもの」（神と一つになる被創造物の完成状態）であるから、至る所に自己自身の否定を含む

絶対意志というのは、我々に最も直接なる現実である。これに比べて自然界は、投射せられた対象の世界、間接経験の世界である。我々に最も直接なる絶対自由の意志は「創造して創造されぬもの」（神）と共に「創造されもせず創造もしないもの」（神と一つになる被創造物の完成状態）である。そのため我々の精神現象は必ず一方に物体现象を伴う。しかし肉体的生活の意義は精神生活にあるのであって、肉体的生活はその手段に過ぎない。

2. 議論

- 1) p.347 7行～ここで、アウグスチヌスの考えをなぜもってきたのだろうか？（佐野先生の問いかけ）

「人間は一方に「神の国」に属すると共に、一方に於ては「悪魔の国」に属している。我々人間の向上も墮落も悲劇も喜劇も皆ここにあると思う。」

- ・動物は生命体を食べて生きるから、どっちも有ると思うが、植物にはあてはまらないのでは。
- ・「神の国」とは直接の世界、自由意志の世界のことで、「悪魔の国」は思惟の世界のことではないか。
- ・側面がある、ということでは？見る時の所与にもよる。二面のどちらにも捉えられる。
- ・「皆ここにある」の「ここ」とはどこのこと？

「神の国」、「悪魔の国」の両方に属しているということですか？

「ここ」は、自由意志の世界のことでは？

「ここ」は、不変的ではなく、如何ようにも変わり得る、ということの意味している？

1) に関して、旧全集2 p.302 「…直接の具体的体験においては、その一々の点が無限なる対他的関係を含んでいるばかりでなく、その一々の点が自由なる主観である。即ち自己の中に自己を否定する力を有するのである。アウグスチヌスが神は最初の人に自由を与えたというように、我々は一々の作用において神に接すると共に悪魔に接するのである…」とある。これに従うと、「ここ」とは、前の文章の、我々が出入している種々の世界であり、(自由なる主観によって)神にも悪魔にも接し得る世界ということにならないか(新木)

2) p.350 4行～「我々に最も直接なる絶対自由の意志は「創造して創造されぬもの」と共に、「創造されもせず創造もしないもの」である、至る所に己自身の否定を含んでいる。の解釈は？

この解釈には、スコトゥス・エリュージェナ (p.341) の『自然区分論』の理解が必要。

自然区分論

1. 創造されず、創造する自然 (神)
2. 創造され、創造する自然 (善、真理、アイデア、存在)
3. 創造され、創造しない自然 (人間の世界)
4. 創造されず、創造しない自然 (神と一つになる被創造物の完成状態)

この文章の解釈については、「善の研究」に出てきた宇宙生成のプロセスを挙げて、神が創造した自分の似姿が徐々に完成に向かう、というそういうことを意味するのでは？という意見も出たが、それ以上は時間切れとなった。スコトゥス・エリュージェナの「動ける静止、とまれる運動」とは？という問いに対しては、渦巻きは、動くけど、動きながらも安定している、というような相矛盾している状態をいうのでは？と。直観と反省で説明すると、直観では自己=自己で止まっているが、反省では自己は自己でない、という動きが生ずる、といえる。*旧全集2 p.284 「エリュージェナが神は動的静、静的動といったように、論理的に矛盾矛盾する両方面を統一したものが実に我々の自由意志の体験である。いかにしてこの如き矛盾する両側面を統一することができるかは論理的には説明できない。」

IV. 哲学的問い

自覚と直観と反省の関係について。

「自覚 (作用の作用ともいうべき絶対自由の意志そのものの立場に立つ) の事実があるから、①人は反省することができる、②自覚の事実があるから直観することができる。また③反省することが直観にもつながるし、逆に直観することが反省につながることもある、という3つの関係の捉え方でよいのか」

- ・自分の内面に何らかの衝撃を受けたエピソードで考えてみると…。

(記録 新木)